



小倉百人一首

おぐらひやくにんいっしゆ

1 天智天皇 てんじてんのう

秋の田のかりほの庵のとまをあらみ

わが衣手は露にぬれつつ

2 持統天皇 じとうてんのう

春すぎて夏来にけらし白妙の

衣ほすちよう天の香具山

3 柿本人麻呂 かきものひとまろ

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の

ながながし夜をひとりかもねん

4 山部 赤人 やまべのあかひと

田子の浦にうちいでて見れば白妙の

富士の高嶺に雪はふりつつ

5 猿丸大夫 ざるまるたいふ

奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の

声聞く時ぞ秋は悲しき

6 中納言家持 ちゆうなごんやかもち

かささぎのわたせる橋に置く霜の

白きを見れば夜ぞふけにける

7 阿倍 仲麻呂 あべのなかもろ

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山にいでし月かも

8 喜撰法師 きせんぼうし

わが庵は都のたつみしかぞ住む

世をうじ山と人はいふなり

9 小野 小町 おののこまち

花の色はうつりにけりないたずらに

わが身世にふるながめせし間に

10 蟬丸 せみまる

これやこの行くも帰るも別れては

知るも知らぬも逢坂の関

11 参議 篁 さんぎたかむら

わたの原八十島かけてこぎいでぬと

人にはつげよ海人のつりぶね

12 僧正 遍昭 そうじようへんじよう

天つ風雲の通り路ふきとじよ

おとめのすがたはしとどめん

13 陽成院 ようぜいいん

筑波嶺の峰より落つるみなな川

こいぞつもりてふちとなりぬる

14 河原 左大臣 かはらのさだいじん

陸奥のしのぶもじずりたれゆえに

みだれそめにしわれならなくに

15 光孝天皇 こうこうてんのう

君がため春の野にいでて若菜つむ

わが衣手に雪はふりつつ

16 中納言行平 ちゆうなごんゆきひら

立ち別れいなばの山のみねに生うる

まつとし聞かば今帰り来ん

17 在原 業平朝臣 ありわらのなりひらあそん

ちはやぶる神代も聞かず竜田川

からくれないに水くくるとは

18 藤原 敏行朝臣 ふじわらのとしゆきあそん

住の江の岸による波よるさえや

ゆめの通い路人目よくらん

19 伊勢 いせ

難波瀉短きあしのふしの間も

あわてこの世をすぐしてよとや

20 元良親王 もとよしんのう

わびぬればいまはた同じ難波なる

みをつくしてもあわんどぞ思ふ

21

今来んといしばかりに長月の
有明の月を待ちいでつるかな

素性法師

22

ふくからに秋の草木のしおるれば
むべ山風をあらしというらん

文屋康秀

23

月見れば千々に物こそ悲しけれ
わが身ひとつの秋にはあらねど

大江千里

24

このたびはぬさも取りあえず手向山
もみじのにしき神のまにまに

菅家

25

名にし負わば逢坂山のさねかずら
人に知られてくるよしもがな

三条右大臣

26

小倉山峰のもみじ葉心あらば
今ひとつたびのみゆき待たなん

貞信公

27

みかの原わきて流るるいずみ川
いつ見きとてかこいしかるらん

中納言兼輔

28

山里は冬ぞさびしさまさりける
人目も草もかれぬと思えば

源宗于朝臣

29

心あてに折らばや折らん初霜の
置きまどわせる白菊の花

凡河内躬恒

30

有明のつれなく見えし別れより
あかつきばかりうきものはなし

壬生忠岑

31

朝ぼらけ有明の月と見るまでに
吉野の里にふれる白雪

坂上是則

32

山川に風のかけたるしがらみは
流れもあえぬもみじなりけり

春道列樹

33

久方の光のどけき春の日に
しず心なく花の散るらん

紀友則

34

たれをかも知る人にせん高砂の
松も昔の友ならなくに

藤原興風

35

人はいさ心も知らず古里は
花ぞ昔の香においける

紀貫之

36

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを
雲のいずこに月宿るらん

清原深養父

37

白つゆに風のふきしく秋の野は
つらぬきとめぬ玉ぞ散りける

文屋朝康

38

わすらるる身をば思わずちかいてし
人の命のおしくもあるかな

右近

39

浅茅生の小野の篠原しのぶれど
あまりてなどか人のこいしき

参議等

40

しのぶれど色にいでにけりわがこいは
ものや思うと人の問うまで

平兼盛

41 壬生 忠見

こいすちようわが名はまだき立ちにけり
人知れずこそ思いそめしか

42 清原 元輔

ちぎりきなかたみに袖をしぼりつつ
末の松山波こさじとは

43 権中納言 敦忠

あい見ての後の心にくらぶれば
昔はものを思わざりけり

44 中納言 朝忠

あうことのたえてしなくはなかなか
人をも身をもうらみざらまし

45 謙徳公

あわれとも言うべき人は思おえて
身のいたずらになりぬべきかな

46 曾禰 好忠

由良の門をわたる舟人かじをたえ
行方も知らぬこいの道かな

47 惠慶 法師

八重葎しげれる宿のさびしきに
人こそ見えね秋は来にけり

48 源 重之

風をいたみ岩うつ波のおのれのみ
くだけでもを思うころかな

49 大中臣 能宣朝臣

みかきもり衛士のたく火の夜はもえ
昼は消えつつものをこそ思え

50 藤原 義孝

君がためおしからざりし命さえ
長くもがなと思いけるかな

51 藤原 実方朝臣

かくとだにえやはいぶきのさしも草
さしも知らじなもゆる思いを

52 藤原 道信朝臣

明けぬればくるものとは知りながら
なおうらめしき朝ぼらけかな

53 右大将 道綱母

なげきつつひとり寝る夜の明くる間は
いかにひさしきものとかは知る

54 儀同三司 母

わすれじの行く末まではかたければ
今日をかぎりの命とまがな

55 大納言 公任

たきの音はたえてひさしくなりぬれど
名こそ流れてなお聞こえけれ

56 和泉式部

あらざらんこの世のほかの思い出に
いまひとたびのあうこともがな

57 紫式部

めぐりあいて見しやそれともわかぬ間に
雲がくれにし夜半の月かな

58 大式 三位

有馬山猪名の笹原風ふけば
いでそよ人をわすれやわする

59 赤染衛門

やすらわて寝なましものを小夜ふけて
かたぶくまでの月を見しか

60 小式部 内侍

大江山いく野の道の遠ければ
まだふみもみず天の橋立

61 いにしへの奈良の都の八重桜
きよう九重このえにおいぬるかな
伊勢大輔

62 夜をこめて鳥の空音ははかるとも
よに逢坂おうさかの関せきはゆるさじ
清少納言

63 今はただ思いたえなんとばかりを
人づてならでいうよしもがな
左京大夫道雅

64 朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに
あらわれわたる瀬々の網代木

権中納言定頼

65 うらみわびほさぬ袖だにあるものを
こいにくちなん名こそおしけれ
相模

66 もろともにあわれと思え山桜
花よりほかに知る人もなし
大僧正行尊

67 春の夜のゆめばかりなる手枕に
かいたく立たん名こそおしけれ
周防内侍

68 心にもあらでうき世にながらえは
こいしかるべき夜半の月かな
三条院

69 あらしふく三室の山のみじ葉は
竜田たつたの川のにしきなりけり
能因法師

70 さびしさに宿を立ちいでてながむれば
いずこも同じ秋の夕ぐれ
良暹法師

71 夕されば門田の稲葉おとずれて
あしのまろやに秋風ぞふく
大納言経信

72 音に聞く高師の浜のあだ波は
かけじや袖のぬれもこそすれ
祐子内親王家紀伊

73 高砂の尾上の桜さきにけり
外山のかすみ立たずもあらなん
権中納言匡房

74 うかりける人を初瀬の山おろしよ
はげしかれとはいのらぬものを
源俊頼朝臣

75 ちぎりおきしさせもがつゆを命にて
あわれ今年の秋もいぬめり
藤原基俊

76 わたの原こぎいでて見ればひさかたの
雲居にまごう沖つ白波
法性寺入道前関白太政大臣

77 瀬を早み岩にせかるる滝川の
われても末にあわんとぞ思う
崇徳院

78 淡路島かよう千鳥の鳴く声に
いく夜寝覚めぬ須磨の関守
源兼昌

79 秋風にたなびく雲のたえ間より
もれいずる月のかげのさやけさ
左京大夫顕輔

80 長からん心も知らず黒髪かみの
みだれて今朝はものをこそ思え
待賢門院堀河

81 後徳大寺 左大臣
ほととぎす鳴きつる方をながむれば
ただ有明の月ぞ残れる

82 道因法師
思いわびさても命はあるものを
うきにたえぬはなみだなりけり

83 皇太后宮 大夫俊成
世の中よ道こそなけれ思い入る
山のおくにも鹿ぞ鳴くなる

84 藤原 清輔朝臣
長らえばまたこのごろやしのばれん
うしと見し世ぞ今はこいしき

85 俊恵法師
よもすがらもの思うころは明けやらぬ
ねやのひまさえつれなかりけり

86 西行法師
なげけとて月やはものを思わする
かこち顔なるわがなみだかな

87 寂蓮法師
村雨のつゆもまだひぬまきの葉に
きりたちのぼる秋の夕ぐれ

88 皇嘉門院 別当
難波江のあしのかりねのひとよゆえ
みをつくしてやこいわたるべき

89 式子内親王
玉の緒よたえなばたえねながらえは
しのぶることの弱りもぞする

90 殷富門院 大輔
見せばやな雄鳥のあまの袖だにも
ぬれにぞぬれし色はかわらず

91 後京極摂政前 太政大臣
きりぎりす鳴くや霜夜のさむしるに
衣かたしきひとりかも寝ん

92 二条院 讃岐
わが袖はしおひに見えぬ沖の石の
人こそ知らねかわく間もなし

93 鎌倉 右大臣
世の中はつねにもがもななきさこぐ
あまの小舟のつなでかなしも

94 参議雅経
み吉野の山の秋風小夜ふけて
ふるさと寒く衣うつなり

95 前大僧正 慈円
おおけなくうき世の民におおうかな
わがたつ杉にすみぞめの袖

96 入道前 太政大臣
花さそうあらしの庭の雪ならで
ふりゆくものはわが身なりけり

97 権中納言 定家
来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに
焼くや藻塩の身もこがれつつ

98 従二位家隆
風そよぐならの小川の夕ぐれは
みそぎぞ夏のしるしなりける

99 後鳥羽院
人もおし人もうらめしあじきなく
世を思うゆえにも思う身は

100 順徳院
ももしきや古きのきばのしのぶにも
なおあまりある昔なりけり